

連	載	
講	座	
第	10	回

## 戦国の一部事務組合・毛利元就

作家 童 門 冬 二

戦国には英雄といわれる人物がたくさんいるが、しかしその人物たちは常に高い山や雲の彼方を見つめていただけない。必ず足元をみる。毛利元就は、安芸国(広島県)の山村吉田というところに生まれた。代々郡山城を拠点にしていた。この地方には、多くの地侍や豪族がいた。それぞれ土地と農民を支配し、境界線で常に争う。土地の境界だけではない。

近くにある山の入会権や、あるいは流れる川の配水権なども争いの対象になった。極端になると、互いに武器を取って戦い合う武闘にまで及んだ。とくに厄介だったのが火災だ。これが大規模な火事になると、その消火作業には到底地域の地侍や豪族ひとりの能力では消し切れない。いきおい、普段争っている他の地侍や豪族の助力を得なければならなくなる。しかし、普段いがみ合っている仲だから、

「頼む」

といっても、そうおいそれとは救援にきてくれない。結局、火災は広がり大きな被害を生んでしまう。火災の出た地域の地侍や豪族は、助けにきてくれなかった他の地侍や豪族を恨む。これがまた憎しみを濃くして、その後の小さな問題でも大きな問題として争うようになってしまう。

郡山城主の毛利元就はこういう状況をじっとみていた。そして、

「こんなつまらないことで争い合うよりも、もっと手を組んで協力すべきだ」

と考えた。このころ、各地域で年貢の重さに喘ぐ農民がよく一揆を起こした。はじめは、一揆を起こす連中が連判状つくったときも、最初に名主や庄屋の名前を書き、その後に村役人の名が連ねら、さらにビラ百姓の名が書かれていく。しかし権力者は、一揆のいうことに理を認めても、

「徒党を組んだ罪は重い」

といっ、一揆の最初に名の書かれている名主や庄屋を処刑してしまう。ビラ百姓たちはそれを悲しんだ。

「自分たちの要求を通すために、名主様や庄屋様が犠牲になって僕になってしまった」そこで、だれが首謀者であるかをわからないにしよう、カラカサ式に名を書くことにした。カラカサというのはむかしの雨具で、広げて上からみると真ん中に芯があって、そこから放射線上に骨が広がっている。その骨の上に名を書くように連判状の形式を改めたのだ。一揆たちはこれを、

「カラカサ連判状」

といった。毛利元就はこのカラカサ連判状に関心を持った。そして、

「これを地侍や豪族たちの連合に使おう」

と考えた。その意図は、

- ・カラカサ状に名前を書くのだから、だれがいちばんエラくてだれがいちばんエラくないという区別はしない。みんな平等である
- ・この連合が扱う問題は、火災の消火・水利権の問題・入会権の問題・土地所有者の境を越えるような大規模な開発の問題・これらの問題を処理するための負担金の問題、提供する労力の問題
- ・これを、集まって協議し、合意を得て実行する

というものである。現在の市町村における「一部事務組合」のようなものだ。

まず身近なところから相談をすると、地侍や豪族たちはたちまち賛成した。かれらもいろいろな問題が起こったときに、

「助力が欲しい」

と思っても、前に書いたようないきさつがあって、なかなか協力が得られない場合が多かったからである。そのために、余計な憎しみの念を加えてさらに争いの根を深くしてしまうことがしばしばあった。みんな、

「こんな状況はなんとかしなければいけない」

とは思っていたのである。そこで元就の提案に賛成し、“カラカサ連合”が結成された。

カラカサ連合では、前に書いたような共同事業を協力しておこなわれ、しだいに地侍や豪族たちのつまらない争いが消えていった。

このころ中国地方には大きな勢力がふたつあった。山陰の尼子(あまご)氏と、日本本州の西端に拠点を構える大内氏である。尼子・大内の二大勢力は、現在でいう“M&A(買収ならびに合併)”をしきりにおこなった。弱小勢力である地侍や豪族は、大勢力の中に組みこまれていく。

「寄らば大樹の陰」

といって、むしろそういう状況をよろこぶ者もいたが、そうでない者もいた。

「絶対に自分が確立した自治を守り抜きたい」

と考える者もいたのである。こういう連中は元就のところに相談にきた。そして、

「なんとかしてください」

と頼んだ。元就は考えた。そして、「カラカサ連合を、尼子・大内二氏の合併政策に抵抗する組織にしよう」

と思い立った。会議を開いてこのことを提案した。地侍や土豪たちは眼を輝かせて賛成した。こうして、はじめは、

「火災の消火などの共同事業をともにおこなう団体」

だった“カラカサ連合”が、今度は尼子・大内という二大勢力が魔手をさし延べたときに、

「共同して抵抗する組織」

の役割も負うことになったのである。これが成功した。弱小勢力であってもひとりでは絶対にか

なわないが、多くの者が集まって共同すれば尼子や大内にも負けない、という自信を連合参加者は持った。連戦連勝だった。

そして、おどろいたことにこのカラカサ連合をひきいた毛利元就が、逆に大内氏や尼子氏をほろぼしてしまったのである。

その後はとんとん拍子に支配地が広がり、山陽地方はもちろんのこと、山陰地方と四国の瀬戸内海側の諸地域、さらに北九州までそれが及んだ。現在でいえば、

「道あるいは州という広域地方自治体」

が出現したのである。その統括者になった元就は、よく連合加盟者に告げた。

「われわれは、広域自治を実現した。これを守ろう。間違っても、天下のことや天下の争いに巻きこまれるのはやめよう」

ちょうどそのころ、織田信長が天下統一をめざして、中国地方にも羽柴秀吉を先手としてさし向けていたからである。毛利元就は、これと徹底的に戦う決意を固めていた。しかし、この考えは間違いだ。それは、日本のどこに住んでいても住民は三つの性格を持っている。

すなわち、

「地方の住民・日本の国民・そして国際人」

ということだ。いかに毛利元就がすぐれた地方の政治家であっても、やはり天下事業はおこなえない。つまりいまでいえば地方自治行政と日本国政とは役割分担が違うのだ。このへんの識別は厳密におこなわなければならない。その証拠に、結果的には天下をめざす信長や秀吉によって、毛利モンロー主義もほろびてしまう。せっかく“カラカサ連合”をつくった元就にも、そこまでの考え方が欠けていたということだ。惜しい。